



第18号
 編集発行／碧南市
 哲学たいけん村
 無我苑
 所在地／碧南市坂口町3-100
 〒447-0087：TEL. 0566-41-8522
 ：FAX. 0566-41-7761



平成十四年十月十日(木)午後七時より碧南市文化会館ホールにおいて、当苑の開村十周年記念事業としてスーパードラマ「ムツゴロウ」を上演しました。梅原猛名誉村長の原作を茂山千之丞氏が演出、装束を横尾忠則氏が手がけた華やかな舞台でした。
 (写真撮影 杉浦清孝 氏)

**碧南市哲学たいけん村無我苑
開村十周年記念事業**

第一部 梅原猛名誉村長特別講演

第二部 スーパー狂言「ムツゴロウ」

**哲学たいけん村無我苑
開村十周年を迎えて**

こころの健康と精神文化醸成の拠点として平成四年六月に開村した「哲学たいけん村無我苑」が十年という区切りをつけました。

日本全土に向けて「無我愛」を提唱した伊藤証信は大正十四年にその活動の地を東京中野から碧南市西端に移し、昭和三十八年にこの地で八年の生涯を閉じました。ご遺族より旧無我苑の土地等を市へご寄贈頂いたことから、その利用方法が検討され、現在の無我苑は、静かな環境に身を置いて、心を落ち着かせ、安らぎを得て頂く施設として新たによみがえりました。

現在の日本は物質的にはたいへん豊かになり私たちはそれを享受しています。が、地球環境問題等、世界は大きな変換の時期を迎え、高度にシステム化された社会に生きる私たちも何か大切なことを忘れかけていないか、また幸せであるように思っています。実はもう一度原点に戻って自分自身をみつめ直す時が来ている、というように思います。無我苑は来苑者が日常の喧騒から離れてみずからを振り返っていただくためのきっかけを今後の運営の中で提供し続け、さらに独創的な事業にも取り組んでいきたいと考えています。

うけれど。

(司会) 六十歳を過ぎて、五十鈴川などで禊の修業をなさっておいでですが、証信先生は神道に興味、関心があつたのでしょうか。

(す) 大政翼賛会の禊があつて、僕もやつた。原田新治君も入つた。大政翼賛会の推進委員とか翼賛壮年団とか、そういうのでやつたもんだから。榎原先生は証信先生とはいつ頃から。

(さ) 大正十四年の秋の夜、竜灯窟においでのはじめにお伺いしました。

(お) わしは、一番よく行ってお目にかつたのは旧い方の無我苑で、その頃からあさ子さんは茶碗を作つて釜で焼いとつた。

(さ) 竜灯団には、何人くらいおられたのですか。七、八人？

(お) もう少しおつたかな、十人くらいか。

(さ) そんなにおつたのですか。

(お) 「無我愛」という新聞は西端においででも出したられたかな。

(す) 慶爾さんが編集しておいでた。僕がよく見たのはべらべらのでね。

あと、満州に三回くらいお行きになつた。建国大学で講義をせられたですね。戦時中のことです。

晩年ですけど、世界連邦。

(さ) あれにだいぶ力を入れておいでました。広島で会議があつて、ご夫妻でお行きになつたですね。私はその時の系譜をいただいで、まだ持つて

おります。

(お) あの世界連邦は、あれでどうなつちやつたの？

(さ) あの会議以後は、たいしたことなかつたですね。証信先生はご熱心でしたね。

(お) 実現となると、なかなかね。

「無我愛」(機関誌)は、手元の本で見ると、明治三十八年から始まつて、ずっと続いて、何回か途中で休刊して。

(さ) 名前も三、四回変わつています。

(お) 昭和三十四年に休刊、発刊より五十五年で二六六号。五十五年かかつて二六六号しか出ておらん。何回か休んでおる。

(す) 無我苑として休刊したのが昭和三十四年か。

碧南には清沢満之さんがおつたでしょう。満之さんの仲間に佐々木月樵、そして佐々木上宮寺から嫁さんをもらつたのが暁烏敏。暁烏さんは若い頃には随分乱暴だつた。自分のお寺の本堂から真っ裸、ふんどし一つで出てくる。晩年は眼が見えなくなつて、とても穏やかになつて。

(お) あれで穏やかになつたのかな。

(す) 暁烏敏さんは、こげな坊主があるかと思うくらい魅力的だつた。恩師である清沢満之さんの墓に参つて、奥さんの在所である佐々木の上宮寺でお参りして、安城の駅の北に説教所があつて、ここで講義をしておつた。その講義を、僕は学生時代の夏休みに聞いておつた。暁烏さんは、

金沢のお寺さんだ。

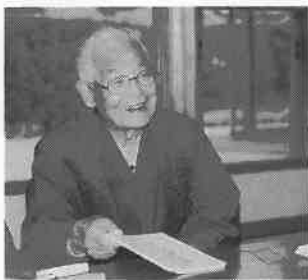
(お) 清沢満之の三羽鳥というのが、暁烏敏と佐々木月樵と多田鼎。

(す) 清沢満之は、日本で有名になる前にアメリカで有名になつた。早く死んでしまつて、生きていけば、よほどか世界のためになつたのに。

(お) 明治三十六年、三十九歳ですね。丁度、正岡子規が三十五、六で亡くなつたでしょう。

(す) 今の松山で、正岡子規は夏目漱石と友達だつた。漱石には、「我輩は猫である」「坊っちゃん」「虞美人草」というような有名な小説がある。

(お) 「我輩は猫である」というのは、俳句の雑誌の「ホトトギス」に載つた。ここで連載して、大評判になつちやつたんだな。ここに出てくる津田青楓という絵描きは、よく漱石の本の装丁をやつた。



岡島 良平氏

(す) 津田青楓さんは、旧無我苑ができた時に、自分の絵の頒布会をして、無我苑に協力せられた。その無我苑を、まち子さんが榎原

先生に相談されて、市に寄付され、今の無我苑ができた。

(さ) それは昭和六十三年十一月、秋のある日のことでした。まち子さんから電話がきましてな、私はすぐお伺いしたんです。そうしたらまち子さんがですね、無我苑は全国の知人、同志によつてできたものである、これを私してはいけない、社会に還元せよ、というのが証信先生のご遺言だつたと、そう言われたです。

それで、すぐ考えたんです。先生の心の内は、よく分かつた、じゃあこの無我苑を西端地区に寄付するか市へ寄付するかというところで、一時間半まち子さんとお話したんです。考えてみれば、これだけのものを地区が維持運営していくのは大変じゃないかという話になりまして、それでは市へ寄付することにしましょうと決定したんです。

二、三日たつて、私は、市の総務部長さんだつたでしょうか、久田昭一さんに、こういうわけで市に貰つてもらえないかと話をしたんです。そうしたら平成元年の一月十日、まち子さん二人で市役所に来てくれと言われて出掛け、市長の応接室で無我苑を市の所有にするために、三人の職員で一時間ちよつと書類を作つてくれました。これが、無我苑の市への寄付の顛末です。

私が今一つ思い出すことは、あさ子さんのお声が綺麗なこと、他には全然知らないです。対談して、話さ

れるのをじつと聞いてみると、実に美しい、濁りのない、澄んだ本当に綺麗な声でした。自分は、いまだにあの方以上のお声を誰からも聞いていないです。

(す) 頭が良くて、体格がわりにしっかりしておいでた。

(お) そうだね。



(す) 見世物になって中村久子さんをこっちに連れてきて、無我苑があつたら、久子さんが有名になった。涙がでるおつたね。私は自分が五体満足で八十六まで生きとることを、本当に感謝せんといかんと思うね。

ここに居る三人を除いて、当時無我苑に出入りしとつた人は、ほとんどいなくなつちやつたね。僕は思うね。人間は亡くなる、伊藤証信先生に言わせると、新生だとおっしゃる。昔の言葉で、生き生まれる、往生だと。だけど、その正しい気持ち、純粋な無我苑の気持ちは、僕らが死んでもこの碧南市で継いでもらいたいと思うな。

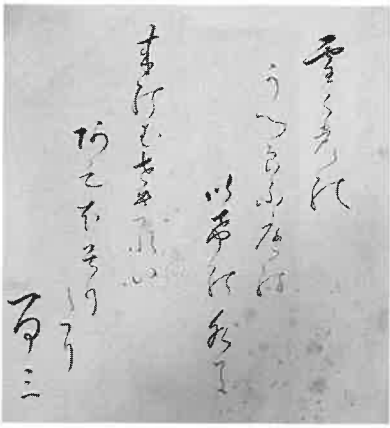
(お) そうですね。

(おわり)

本号で「伊藤証信翁にまつわる思い出(座談会)」の連載を終わります。次号では昭和三十七年春、桜桃会での苑主最後の講演「人間は死んだらどうなるか」についてを講演記録テープをもとに掲載します。

伊藤証信の遺品

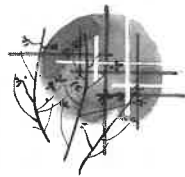
大正・昭和期の劇作家・評論家である倉田百三(一八九一〜一九四三)は大正四年十二月下旬、京都で西田天香に会い、一ヶ月間へ一燈園で思索生活をしていきます。西田を親鸞のモデルにして書いた戯曲「出家とその弟子」で一躍有名になりました。倉田は、機関誌「無我愛」に度々寄稿し、西端の無我苑建設記念講演会(昭和十年一月二七日)で講演(演題「活ける信仰と歴史の浄土」)をしています。生涯を病氣と闘いながら創作活動を続け、五十二歳で没しました。



雪久裳能
宇川良不庭能
以希能水爾能
來能武左遺礼八
阿之本曾利
多利

百三

西端の無我苑建設記念講演の際の色紙。倉田四十四歳。ゆつくりと慎重な筆致を思わせる。



編集室より

◇かわら版第十六号掲載の「伊藤証信翁にまつわる思い出(座談会) 第三回」中(養女の)あけみさん

↓(長女の)あけみさん

あけみさんは、代用教員の資格があつた
↓教員の資格があつた

の誤りでした。関係者の皆さまに謹んでお詫び申し上げ、訂正いたします。

◇平成十四年九月三十日の夜、伊藤証信氏の長女伊藤まちさんがご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

◇無我苑では前期・後期の各期四講座の哲学講座を開き、久野昭先生(国際日本文化研究センター名誉教授・無我苑顧問)にオプザーバー、講師を担当していただいております。その昔、苑主伊藤証信翁が旧無我苑の研修道場で、ドイツ語や東洋哲学の講義をした源流をうけつぎ、現在は広々とした畳の和室で小鳥のさえずりや庭園の静けさを傍らに、様々な世代の方々が聴講しております。十五年度は「ソクラテス」をメインテーマに、六月七日(土)から毎週土曜の四週連続で前期哲学講座を開講します。どなたでもご受講できます。また同年度の新規事業に聞香の体験講座、「自分探し」をテーマにしたエンカウンター・グループ(二泊三日の研修)を予定しています。

